

国語科における資質・能力の育成を目指した授業づくりのポイント

1 教材分析について「教材分析はこう変わる」 《子供に身に付けさせる力の視点からの教材分析 Q&A》

Q1 そもそも、国語科で子供に身に付けさせたい力(資質・能力)とはどのような力ですか？

A1 それは、「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」です。新学習指導要領ではこの資質・能力を次の三つに整理しています。

- 【知識及び技能】(1)言葉の特徴や使い方に関する事項 (2)情報の扱い方に関する事項 (3)我が国の言語文化に関する事項
- 【思考力・判断力・表現力等】A話すこと・聞くこと B書くこと C読むこと
- 【学びに向かう力・人間性】国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う

これらの資質・能力を育成するイメージを、教科書の「人をつつむ形—世界の家めぐり—」(東京書籍3年下)を例にして説明します。この教材では、事例として示された「家のつくり」を読み取りますが「世界の家のつくりについて詳しくなること」が国語科の資質・能力ではありません。教科書の「家のつくり」だけを理解したとしても、様々な文章や資料を読み解く力として活用はできませんよね。つまり、教材の内容を伝えるだけ(図1)ではなく、**教材の内容を深く理解させながら活用できる汎用的な言葉の力を身に付けさせたり、国語の大切さに気付かせたり**すること(図2)が、国語科での資質・能力の育成となるのです。



Q2 資質・能力を育成するには、どのような視点で教材を分析すればよいのでしょうか？

A2 **子供の姿に視点を当てた教材分析**をしましょう。教材は、「教科書にあるから学習するのだ」と思っていないか？それは、「内容を伝える」教師のための教材分析です。子供に視点を当てるとは、**子供の「課題を見る」**ことです。上記の「人をつつむ形—世界の家めぐり—」を例にします。この教材で付けたい資質・能力は何でしょう。教科書には「言葉の力」として【書いてあることを整理する】とあります。学級の子供の実態として、**複数の情報を整理して読むことに課題がある**場合(学力調査等で検証)、その子供の課題を解決して、能力の定着を目指すには、どのような単元や授業にすべきか考えることが教材分析の視点になるのです。具体例を挙げると、「人をつつむ形—世界の家めぐり—」でそれぞれの事例の紹介の仕方の工夫、図や写真に対応する叙述の捉え方、三つの家の共通点や相違点の表し方や筆者の考えの述べ方等を分析しながら、子供が**「複数の情報を整理して読めるようになる」**には、**何を理解させるのか【知識及び技能】、理解したことをどう活用させるのか【思考力・判断力・表現力等】、その過程で国語の大切さをどのように自覚させるか【学びに向かう力・人間性】**、そのために、どのような言語活動を設定するのか等、**学級の子供の課題を解決するための教材分析**が大切な視点です。



2 授業構成・授業展開について「教科の本質に向かう学びへ」 《授業展開の工夫 Q&A》

Q3 資質・能力を育成するための授業展開と従来の授業展開との違いはどこですか？

A3 基本的には、これまで実践してきた授業展開と変わりませんが、資質・能力の育成を目指す授業展開のキーワードとして『**主体的・対話的で深い学び**』が挙げられます。では、『主体的・対話的で深い学び』に向かう授業展開のポイントは何か？以下に三つ紹介します。

①【子供の問いから授業をつくる】

例えば、「ポスター形式で伝えよう」の授業で、教師が「今日は見出しの書き方を学習しましょう。」と一方的に課題を与えても子供たちの主体的な学びにはなりません。「この見出しでいいのかなあ?」「もっといい見出しにできないかな?」と、子供が自分ごととして解決したいと思える、**子供自身の「問い」**が授業展開のポイントになります。

②【多様な考えを生む授業をつくる】

物語文だと「作品の山場の場面を探す」等、予め答えが決まっている問題を解決する展開ではなく「山場の場面を熟語で表す」のように、多様な答えが生まれる展開を仕組むことです。子供は、自分の考えた漢字と友達の考えた漢字を比較したり、自分の漢字を再考したりして、より深い内容の理解にもなるので、**多様な考えを生む授業づくり**がポイントです。

③【振り返りを繋げた授業をつくる】

スピーチの学習の振り返りで「話すとき、間を取ると良いことが分かったけれど、どこで取れば良いかまだ分からない。」と書かれていたならば、次の授業では「間はどうのようところで取ると良いかな?」と**振り返りの「問い」**を授業の「問い」に**繋がります**。振り返りは、子供の学びの事実の声です。その声を繋げて授業をつくるのがポイントです。

Q4 『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業とは、実際にはどのような授業ですか？

A4 例を挙げて説明します。一つ目は、**言語活動の質の向上**を目指す授業です。第五学年の「立場を決めて討論をしよう」の学習では言語活動を、『賛成か反対か立場を決めて討論を行うこと』にしました。そうすると、授業では、「討論の質を高めるための言語活動」が展開の中心となります。実践例を紹介しましょう。この45分の授業では、討論するために「説得力のある主張の仕方」についての学習をしました。

まず、隣同士で、考えてきた主張を話してみる。すると「上手いかなあ。なぜだろう?」という問いが発生。

「説得力のある主張したい。」という自分の問いを解決するために、モデル文や動画を参考にしながら「説得力のある主張の仕方」を学ぶ。

見付けた「説得力のある主張の仕方」を使い、自分の主張を再構成する。そして、もう一度友達に話してみる。「なるほど、より良い主張になったぞ。」

スタート 単元学習(言語活動の質) ゴール

「なるほど、より良い主張になったぞ。」に至るまでの過程を振り返る。そして、単元のゴールである「討論会」に向けた学習の脈絡のなかで、自分は、何ができていて、次に何が必要かをメタ認知できるようにする。

このように、一連の言語活動を主体的・対話的に取り組みながら、深い学びによって、その活動の質を向上させることが授業展開でも重要です。

二つ目は、**国語的な見方・考え方を働かせた**授業展開です。特に『主体的・対話的で深い学び』の『深い学び』に向かうには、言葉の見方・考え方を働かせた授業展開が必要になります。第一学年の教材「どうやって身を守るのかな」を例にしましょう。授業では、「どのようにしてみをまもるのでしょうか。」という問いをつくり、写真を三通り掲示して、どれが正しい身の守り方かを考えています。このとき、選ぶために**着目させるところが見方**で、その結果どれが正しいのか**思考することが考え方**になります。具体的には五段落の「とげをたてて」や六段落の「うしろむき」や「とげをたてます」という言葉とそれを表す写真に着目させ(見方)、整合しているのはどれかを選ぶこと(考え方)です。見方・考え方を働かせ、言葉の意味や働き、言葉での表し方の良さに気付くことが深い学びにも繋がります。

『主体的・対話的で深い学び』は資質・能力を育成するための**学びの在り方**ですから、「これが正しい」といったものではありません。しかし、授業では知識・技能の定着だけでなく、それらを**子供が自在に活用し、様々な問題解決に役立てられるような豊かな学びの在り方**を目指しましょう。